様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５　月２８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５９２４２９
研究課題名（和文）　日本と開発途上国の看護技術の差異に関する研究

研究課題名（英文）　Study on Differences in Nursing Techniques between Japan and Developing Countries

研究代表者
森　淑江　（MORI　YOSHIE）
群馬大学・医学部・教授
研究者番号：９０１５０８４６

研究成果の概要（和文）：
研究目的は，わが国の開発途上国に対する効果的な看護協力のために，日本と異なる看護技術・ケアの差異を明らかにすることである。39 カ国の青年海外協力隊員の活動報告書の分析と 14 カ国の隊員への面接結果から得られたデータを厚生労働省の報告書で示された看護技術の到達目標に従って分類した。世界のいずれの地域でも感染防止の技術の違いに関する記述が多かった。日本と異なる看護は，その背景から６つに分類されることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
The purposes of this study are to clarify differences in nursing care and techniques between Japan and developing countries and thereby to pursue international nursing cooperation suited to the situations of respective recipient countries. Descriptions of nursing differences from Japan were selected from the activities reports of volunteer nurses dispatched by Japan International Cooperation Agency to developing countries and semi-structured interviews were also conducted. The data was categorized with reference to basic nursing and midwifery skills of some reports (Ministry of Health, Labour and Welfare). Many statements concerned infection prevention skills. Given the descriptions on differences in nursing and probable background that may be affecting practices, it is considered that such different nursing practices may be classified in six categories.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：国際看護学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：日本，途上国，看護，助産，技術，差異，国際協力

１．研究開始当初の背景

戦後の日本の国際看護協力は1960年代初めに始まり，すでに50年近い歴史がある。当初はNGOによる活動が中心であり、派遣される看護職者（保健師、助産、看護師）は年間数名～10数名程度であった。その後政府開発援助の一環として1965年に青年海外協力隊（以下協力隊とする）が創設されると、国際看護協力に携わる看護職者の数は飛躍的に伸び、協力隊だけでもこれまで40年間に1,771名派遣された[1)]。これに独立行政法人国際協力機構（JICA）の看護専門家や国際緊急援助隊員、40のNGOや日本赤十字社からの派遣等を合わせると、保健医療職種の中で最多数の3千数百名の看護職が国際協力に従事してきたと推計される。

国際看護協力を行う際の問題点の一つとして、派遣された国における看護に関する考え方や看護技術の日本との違いが挙げられる。戸塚[2)]の協力隊看護職隊員による技術顧問に対する質問状の分析結果によると、質問内容は日本の経験と異なる派遣国の看護技術・ケアの違いに関する事項が最も多く、滅菌・消毒、看護ケア・診療に関する質問が全体の32%を占めていた。また、横川ら[3)]の協力隊看護職隊員に対する調査によると、派遣された国の看護で驚いたことは清潔概念・操作、物品・医薬品管理、看護のレベル、看護業務の違いなどとなっている。

協力隊員によると、当初は自分が日本の看護基礎教育の中で習い実施してきた看護技術が正しいと考え、それを相手に指導しようとして日本とは異なる方法で行っている現地の看護師と摩擦を生じることがある（隊員の報告書、本人からの情報等より）。現地の方法との折り合いをつけて望ましい方法を見つけ出して行くにはかなりの時間と労力を要している。しかし看護技術については、日本の方法が必ずしも絶対に正しいわけではない。日本で教えられる技術がすべて科学的根拠に基づいているわけではなく、経験を基に手順がつくられている方法もある。また相手国の看護師も一応の理由づけとともに看護技術を学んでおり、日本人の指導に簡単には同意できない。異なる看護技術の例として、日本では清拭は循環を促すために抹消から中枢へ向かって行うと教えられるが、ラオスでは汚れがよりとれるように中心から末梢に向かって清拭を行うように教育されている。根拠については、少なくとも末梢から中枢へという方法が循環を促すかどうかについて否定的な実験結果が出ている[4)]。国際協力に従事する看護職者はこのような日本と相手国の看護や看護技術の違いを目の前にして、どちらが、あるいは本来はどれ（何）が望ましいのかと考えながら試行錯誤でこれまで看護に関する協力を行ってきた。看護や看護技術・ケア（助産に関連する技術・ケアを含む）は、その国の背景や状態によっての違いがあると考えられる。しかしこれまでそれらの違い、日本と異なる看護や看護技術の存在については体験記の中で断片的に示される程度であり、ほとんど研究的には明らかにされてこなかった。一方的に押しつけるのではなく相手の状況を尊重しつつ改善の方法を示すことが国際協力には望まれるが、まず開発途上国の看護がどのようであるかを明らかにすることによって試行錯誤から

脱し、国際看護協力の経験を積み重ね、協力の質を高めるためには重要と考えられる。

２．研究の目的

日本と異なる国の看護技術・ケアの差異を明らかにするとともに根拠を分析し，日本の看護技術の国際的通用性を検証するとともに，我が国の開発途上国に対する効果的な看護協力の在り方について検討する。

３．研究の方法

本研究では，①国際協力に従事する看護職が各国での活動の中で記載した活動報告書の分析，③活動した看護職への半構成的面接調査を実施し，併せて開発途上国での看護技術適用場面の観察と関連資料の収集を行い，「日本と異なる看護技術・看護ケア」について抽出するとともに，行われていない看護についても分析した。なお本研究においては，看護技術・ケアという用語に助産に関連する技術・ケアを含んで分析した。

１）対象

① 活動報告書

対象は，十分な記録が残され、国民に公開されていて閲覧可能な，平成16年4月以降に派遣された青年海外協力隊看護職隊員によりJICAに提出された活動報告書とした。2年間に5回の提出が義務づけられている。

② 活動した看護職への面接

青年海外協力隊員として派遣された経験のある看護職に対して調査の主旨を紙面および口頭で説明して協力を依頼し，書面に署名して同意を得た者に対して面接調査を行った。対象者は，雪だるま式抽出法により得た。

２）調査期間

報告書の分析および半構成的面接調査は，平成19年4月から平成22年1月まで実施した。

３）調査場所

報告書は日本国内で入手し分析した。面接については任期を終了して帰国した協力隊員に対して日本国内で行った。日本国内で関連資料の収集に努めるとともに，看護技術の適用場面と関連資料の収集については，ラオス，メキシコ，モンゴルで実施した。

４）分析方法

活動報告書については，「日本と異なる点」として記述されている看護に関する部分を抽出して素材とした。素材を何度も熟読し，１つの意味を持つ内容を１つの文章に分けて，意味が変わらないように短文化して分析のデータとした。

面接については対象の同意を得て録音し，録音記録から逐語録を作成し，その中から看護に関する部分を抽出して素材とした。素材を何度も熟読し，１つの意味を持つ内容を１つの文章に分けて，意味が変わらないように短文化して分析のデータとした。

報告書および面接から得られたデータは，最終的に平成16年3月の厚生労働省『新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会報告書』に示された「看護技術についての到達目標」の13の大項目と69の小項目，「助産技術についての到達目標」の3つの大項目と28の小項目を参考に分類した。

５）倫理的配慮

報告書は一般公開及び複写が許可されたものを対象とし、面接調査では、対象者に本研究の目的、方法、本研究の参加は自由意思で途中中断も可能であること、参加の拒否や途中中断による不利益はないこと、内容は研究以外では使用しないこと、個人の名前は特定されないこと、データの正確性を確保するために本人の同意を得て IC レコーダーに録音し、録音内容は逐語録として記録した後は消去することを説明した。また、口頭及び書面で説明を行い書面で同意を得た。同意書は2 通作成し、研究参加者と研究者で各々一通を所持した。

４．研究成果

アジア，アフリカ，中南米，大洋州，中東の５地域39カ国に派遣された協力隊員の報告書が分析の対象となった。記述量については，隊員間で大きな差があり，抽出項目にも違いがみられたが，9割以上が何らかの違いについて記述していた。半構成的面接については14カ国に派遣された協力隊員に対して行った。

報告書には，いずれの地域でも異なる看護技術として感染防止の技術に関する記述が多くみられた。次いで【与薬の技術】の＜皮下注射，筋肉内注射，皮内注射＞＜静脈内注射，点滴静脈内注射＞および【症状・生体機能管理技術】の＜バイタルサイン（呼吸・脈拍・体温・血圧）の観察と解釈＞についての記述が多かった。バイタルサインの観察と解釈については，測定の不確かさや数値の読み取りの疑問に関する記述が散見された。各地域で日本では医行為とされるいくつかの技術が看護師の技術として記述されており，日本の看護師との業務範囲の違いがみられた。

助産技術の違いは，特にアフリカに関して多く抽出されており，子宮底圧迫法の実施，新生児の取り扱いなどに違いがみられた。

助産看護技術および助産技術の到達目標の項目には分類できない看護に関する記述として，各地域で「患者の世話を家族がしている」「看護職員として必要な基本姿勢と態度」などがあげられていた。

隊員の観察力や文書作成能力の違いにより，報告書への記述量が異なり，その結果抽出項目に差があったと推測された。しかし調査対象となった報告書を書いた協力隊員の 9 割以上が日本とは異なる看護について記述しており，日本の看護職が開発途上国で看護活動をする際には，日本との何らかの違いがあることを必ず念頭におく必要性があると考えられた。

協力隊員による報告書の記述および面接結果から，日本の看護との違いとその違いに影響を与えていることについて検討し，異なる看護について次のように分けられるのではないかと考える。

１）医行為のように，日本と任国の看護師の役割との違いに起因すると考えられるもの

２）汚物の処理に代表されるように，日本の看護師は行っても，カースト制度のような，その国の社会制度によって看護師以外がすべきことと考えられているために行っていないこと

３）清拭のように，日本では熱い湯で行うことが好まれるが，気候の違いにより異なる方法で行われること

４）ストレッチャーによる移送方法の違いのように，文化に基づくこと

５）十分な物品がないため，代用手段をとっていると思われること

６）世界的な規準から見ると不適切と考えられること。これについては，新しい知識が普及していないためか，それとも一見不適切ではあっても，何らかの理由があるのかは不明。

看護は様々な因子の影響を受けてその国独自のものが発展していると推測できる。各国で看護の違いがあることを前提に，違いに影響を与える因子や理由を考慮しつつ，その国の方法を踏襲して行うべきこと，逆に改善すべきところを見極めて働く，あるいは国際看護協力を行うことが重要だと考える。

文献：

１）森淑江：国際協力が目指すもの．上毛新聞，2006.4.17，2006

２）戸塚規子：開発途上国で保健医療協力に携わる看護職の活動上の問題-青年海外協力隊員の求める技術支援の分析から-．第19 回国際協力学術奨励研究報告書，39-42，1997

３）横川裕美子他：看護職による国際協力活動の還元に関する研究－国際看護協力の異文

化適応の視点からの考察－. Kitakanto Med J, 52(5):361－368, 2002

４）松田たみ子他：清潔への援助技術；循環を促す清拭の技術科学的分析. 別冊ナーシングトゥディ, 9:84-88, 1996

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①高田恵子、森淑江、辻村弘美、宮越幸代、栗原千絵子、長嶺めぐみ、日本と開発途上国の看護の差異に関する研究-ラオスで活動した青年海外協力隊員への面接と報告書の分析-、Kitakanto Med J、査読有、Vol.60、2010、pp31-40

②高田恵子、森淑江、辻村弘美、宮越幸代、栗原千絵子、長嶺めぐみ、ラオスの助産技術－青年海外協力隊へのインタビューと報告書の分析－、埼玉県立大学紀要、査読有、Vol.11、2009、pp1-10

③辻村弘美、森淑江、高田恵子、宮越幸代、日本と途上国の看護技術の差異(中国)-中国で活動した青年海外協力隊員への面接と報告書の分析-、Kitakanto Med J、査読有、Vol.59、No.1、2009、pp51-58

④宮越幸代、高田恵子、辻村弘美、森淑江、日本と開発途上国の看護技術の差異に関する研究-中南米と日本で発行された看護技術書の分析-、Kitakanto Med J、査読有、Vol.58、No.1、2008、pp43-54

〔学会発表〕（計15件）

①Mori Y、Tsujimura H、Takada K、Miyakoshi S：Study on differences in nursing between Japan and asian countries .”Nursing Education-80 in Mongolia” International Conference for the 80th Anniversary of Nursing school、Health Sciences University of Mongolia、2009.9.25、モンゴル健康科学大学（ウランバートル）

②栗原千絵子、宮越幸代、高田恵子、長嶺めぐみ、辻村弘美、森淑江：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究－セネガルで活動する青年海外協力隊の報告書からの分析－. 国際看護研究会第 12 回学術集会、2009.9.12、JICA地球ひろば（東京都）

③長嶺めぐみ、宮越幸代、高田恵子、栗原千絵子、辻村弘美、森淑江：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究－大洋州で活動する青年海外協力隊の報告書からの分析－. 国際看護研究会第12回学術集会、2009.9.12、JICA地球ひろば（東京都）

④宮越幸代、森淑江、高田恵子、辻村弘美、栗原千絵子、長嶺めぐみ：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究 - ボリビアで活動した青年海外協力隊の面接と報告書からの分析 - . 国際看護研究会第 12 回学術集会、2009.9.12、JICA地球ひろば（東京都）

⑤宮越幸代、森淑江、高田恵子、辻村弘美、栗原千絵子、長嶺めぐみ：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究 - メキシコで活動した青年海外協力隊の面接と報告書からの分析 - . 国際看護研究会第 12 回学術集会、2009.9.12、JICA地球ひろば（東京都）

⑥宮越幸代、森淑江、高田恵子、辻村弘美、久保田めぐみ、栗原千絵子：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究－中南米諸国で活動した青年海外協力隊員による報告書からの分析－. 第24回日本国際保健医療学会学術大会、2009.8.6、東北大学（仙台市）

⑦高田恵子、宮越幸代、森淑江、辻村弘美：日本と開発途上国の看護技術の差異に関する研究 - ラオスで活動した青年海外協力隊への面接と報告書の分析 - . 第24回日本国際保健医療学会学術大会、2009.8.6、東北大学（仙台市）

⑧宮越幸代、森淑江、高田恵子、辻村弘美：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究　観察・測定した結果が事実とは異なる実態の検証. 第49回日本熱帯医学会大会・第23

回日本国際保健医療学会学術大会合同大会、2008.10.26、国立国際医療センター（東京都）

⑨辻村弘美、森淑江、高田恵子、宮越幸代：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究―中国で活動した青年海外協力隊員への面接と報告書からの分析―.国際看護研究会第11回学術集会、2008.9.20、JICA地球ひろば（東京都）

⑩森淑江、辻村弘美、高田恵子、宮越幸代：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究―アジア地域の看護に関する分析 ―.第22回国際保健医療学会学術大会、2007.10.8、大阪大学コンベンションセンター(吹田市)

⑪高田恵子、辻村弘美、宮越幸代、森淑江：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究-ラオス、ベトナム、中国の基礎看護技術に関する分析 -.第22回国際保健医療学会学術大会、2007.10.7、大阪大学コンベンションセンター（吹田市）

⑫森淑江、辻村弘美、高田恵子、宮越幸代：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究―ネパールの看護に関する分析 ―.国際看護研究会第10回学術集会、2007.9.15、JICA地球ひろば（東京都）

⑬宮越幸代、高田恵子、辻村弘美、森淑江：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究－中南米で発行された看護技術書の分析－. 国際看護研究会第 10 回学術集会、2007.9.15、JICA地球ひろば（東京都）

⑭高田恵子、辻村弘美、宮越幸代、森淑江：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究―ラオスの看護に関する分析―.国際看護研究会第10回学術集会、2007.9.15、JICA地球ひろば（東京都）

⑮辻村弘美、高田恵子、宮越幸代、森淑江：日本と開発途上国の看護の差異に関する研究―中国で活動する青年海外協力隊の報告書からの分析―. 国際看護研究会第 10 回学術集会、2007.9.15、JICA地球ひろば（東京都）

６．研究組織

(1)研究代表者

森　淑江（MORI YOSHIE）
群馬大学・医学部・教授
研究者番号：90150846

(2)研究分担者

辻村　弘美（TSUJIMURA HIROMI）
群馬大学・医学部・助教
研究者番号：70375541

高田　恵子（TAKADA　KEIKO）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：50369378

宮越　幸代（MIYAKOSHI　SACHIYO）
長野県看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：00269565

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：